

新時代の文藝 と

和歌俳句の藝術味

小山龍之輔著

不老閣書房

不許複製製

(定價三圓十二錢)
不老閣書房發行

東京市外大久保百人町九二
振替東京二七〇二一

大正十四年十一月五日印刷
大正十四年十一月八日發行

著者

小山龍之輔

發行者

東京市外大久保百人町九二
中西貞

印刷者

東京市小石川區戸崎町一三
多木壽一

東京市日本橋區大傳馬町

淺見文林堂

東京市日本橋區數寄屋町

六合館

大阪市東區北久太郎町

柳原書店

東京・小石川・多木印刷所・印刷

著者いふ

此の書は國文學の藝術味と國文の教授とに關する知識以前の知識の胚種である
此の書は將來十年のうちに著者が公にせんと欲する「文學論」と「和歌俳句の藝術的
研究」と合せて三部作の一である

此の書は誰れ曰く彼れ曰くの羅列にあらず嬰兒龍之輔が氣隨氣儘の叫びである
此の書は眞實にして平凡なる難解事を正直平易平凡に直示せる拈華微笑錄である
此の書は著者が魂の電光石火的投影にして「おゝ石石何が浮世とごろりかな」より驟
起して歩み出したる第一歩の足跡である

Den Stoff sieht jedermann vor sich,
den Gehalt findet nur der, der etwas
dazu zu tun hat, und die Form ist
ein Geheimnis den meisten.

Goethe.

新時代の文藝と和歌俳句の藝術味目次

前篇 新時代の文藝

1	論に先だちて……………	二
2	余のからだ全體主義の藝術……………	九
3	新感覺派の主張とその作品……………	六四
4	日本藝術の故郷記紀の歌……………	九八
5	記紀の歌と新時代の文藝……………	一八二
6	歐洲の新藝術と新時代の文藝……………	二五〇
7	感覺のオーケストラ……人形芝居と能樂……………	二七四

後篇 和歌俳句の藝術味

1	和歌俳句の本質	三三八
2	和歌俳句の韻律	四二二

前篇

新時代の文藝

一 論に先だちて

此の七月三十一日、歌舞伎座の夏興行としてやつて來た文樂座を見物して、人形の線と形との動きから、淨瑠璃の音樂から、能樂の人物の線と形との動きや囃子の音樂を思ひ浮べて、此の二藝術に表現されてゐる美に於いて趣味ある對照を實感すると同時に、此の兩者を一貫して日本獨得の叙情詩的な血の流れてゐることを實感した。そして歐洲藝術界の新運動である表現主義のねらひ所の或一點を既に日本人がやり遂げてゐるわいと考へた。それから此の二藝術の表現に於ける、寫實を離れてゐながら感覺味のたつぷりある彫刻のリヅミカルな動きが私をして此の頃のわが文壇をにぎはしてゐる新感覺派のことを思ひ出させた。けれど、こんなことを考へたり、思ひ出したりしたわけは、私がこの五六年來感じてゐた藝術的衝動氣分が、能樂や人形淨瑠璃の氣分にどこか相通する所があり、又私の考へてゐる藝術哲學が表現主義エクスプレシヨニズムと相似てゐる點を有し、又此の頃の若人のいふ新感覺主義とやらに似てゐる點を持つてゐるからであらう。所が、大正十四年七月號の新潮誌上に於いて、生田長江氏の新感覺主義の批評に答ふべく、片岡鐵兵氏のかいた「氣體的生活者に答ふ」の文を見て、長江氏の批評そのものを讀んでゐない私は、片岡氏の答が長江氏への答として妥當であるかどうかはわからないが、

片岡鐵兵氏の答へてゐる主張そのものに即して讀み考へた私は直に所謂新感覺派は、否少くとも片岡鐵兵氏は理論に於いて私と兄弟らしいと思つた。次に同月號「文藝時代」所載横光利一氏の作「街の底」を讀んで、横光氏は作品に於いて、少くも「街の底」に於いて、余と兄弟だぞと思つた。と同時に古事記や日本書紀の歌が余のからだ全體主義の藝術の父母だと思つた。かくの如き心持が余をして此の著述をかゝせたわけである。その論たるや多岐にわたらねばならないが、此書では、余のからだ全體主義の依りて以て立つ原理、片岡氏の新感覺主義と横光利一氏の作品との批評日本藝術の故郷としての記紀の歌、和歌俳句の本質及び韻律、記紀の歌と新時代の藝術、以上の五項外二項について余の考へを述べることにする。要するに新時代の藝術は感覺のオーケストラであり、感覺のデモクラシーであり、物我一如の禮讃であり、物にも偏せず、我にも偏せず、物我に對してからだ全體を徹底して心ゆくまで生きんとする藝術なることを明らかにするのを目的とする。

次に所謂新感覺派に關する材料は大正十四年七月號の新潮と同八月號の新潮と同七月號の文藝春秋と同八月號の文藝時代と横光利一氏の作品「御身」とだけであつて誠に少いのである。これらの誌中に於ける新感覺派論や作品や横光氏の作品集から、材料を採つたのであるから、正直な所「瞥見」といつてよいものである。瞥見なるが故にその全貌を見得ないと人はいはんか、瞥見でも電光的X線の視力

あるものの瞥見は瞥見ならずと答へて置かん。乞ふ事實について余の論を見よ。トルストイが彼の小説の中で、多くの女から女へと轉々あさり行く男よりも一人の女を守りし、かと思つて行く男の方がより深く女を知るものだ、といふ意味の事を述べてゐる如く、生命の光らない多讀は讀まないと同じであり、多くの量に對する外的接觸は空氣に觸れてゐるとかはらない、生命がX光線を放射する所のみ、物事の本質が姿を見せるものだし、見ぬき得るものであると私は固く信じてゐる。哲學的ないひ方をすれば、理念の働きかけて行く所に於てのみ、始めて量は質にかはり、經驗が生命そのものになるのである。だから、私は私の論の材料の少いのを嘆かない、たと量がよけいになれば歸納といふ論理を過信してゐる科學の盲信者をなせる程とうなづかせ得る手段にうまくつかへるから、量の足りないのを不便に思ふだけである。だから、量を決して輕蔑無視する私ではないが、生命の光を放射せざるものが量の羅列と分類と計算と分拆とを以て質をつかみ得るものと信じ、つかみ居ると自任してゐるのを無視する私であることを宣言して置く。

ん、汝は記紀の歌を云々するからには、何かの交渉を新時代の藝術に見出さんとするのであらう、何とかへりくつを並べて關係のないものに關係をつけようとするのだらう。二千年の大昔の人と大正の新人とを結びつけようとするおまへの企てはミイラと生きた人間とを結婚させよ

うとする空想だと。然り、私は私のからだ全體主義や新感覺主義中に色んなものを見出してゐるのである。外から結びつけるにあらすして中からつかみ出すことによりて外のものとの關係結び目を見出すのである。どうせ、人間のやることだ、お互に關係のないなんてなことは有り得よう筈がない。そこで一つの例を以て私の仕事の空想でないことを示さう。

言靈を八十の衢に夕占問ふ占正に謂れ妹に逢ひ依らむ。
ことだま やそ ちまた ゆふけ うらまさ のいも

（事靈八十衢夕占問占正謂妹相依。謂をのると訓じ、妹相依を妹は相依らむと訓する人があるが、私はこれらの訓を否定する。その理由をこゝでいふのは止めにする。藝術の解釋方法論の大きな問題に及んで行くから。）これは萬葉の卷の十一にある歌で、戀する男が愛人にあひたくてたまらず、どうかあへますやうにと、四辻かどこか道の多く別れ／＼になつてゐる所へ出て、行人の會話に耳傾けて、その語る言葉によりて逢瀬の可能不可能を占つてゐる時の心持を歌つてゐるのである。「逢ふ」に關した縁喜のよい言葉口占が聞けたらばと胸どきつかせつゝ巷にそよと立ち出で、さあ辻占よ正直に出てくれ、俺は愛人に逢つて抱擁しようと思つてゐるんだから、と戀する男が切ない思ひを全的に辻占へ投げ込んでゐる心持がよく出てゐる。さうして、此の心持を生活の遺傳として、見よ、現代のわれらの生活中に響いてゐる言葉「辻占」を。これでも、まだわからぬといふものがあるか。然り、辻に

出てこそ人の言葉を聞かざれ、紙の上なる文字でふ記號により、みくじにより、自己の判斷を失へる弱き惱める處女や相場師や誰やらが眞劍になつて占ふことの今も實在してゐることを思へ。だから、私が現代の言葉「辻占」の中に古代人の *Magic of Word* の信仰を見出す如く新時代の我々が生み出し來りし新感覺的氣分の中に記紀の歌人の氣分を探り、二つの藝術に何ものか相通するものの存在を見出さんとすることは、決して龍宮へ龍のあぎとの玉をとりに行くやうなものではないことがわかるであらう。かるが故に、新は舊を縁として生れて舊を所有し居ることは恰も父母を縁として生れし子が父母を自己のからだに所有し居るが如してふことを人は先づ知り置くべきである。

次に、藝術評論に關する私の態度に就いて述べて置かうと思ふ。藝術家はからだ全體で見て、感じて考へるものであり、哲學者や科學者は頭だけで即ち概念で見て、感じて、考へるものであるから、からだ全體で創造したる藝術品を概念のみで鑑賞評論してもそれは藝術品を分析したり、その外廓をなでまはしたりすることになるだけで、藝術の本質に突入出來ない。即ち、美學や心理學や哲學科學から出發してゐる鑑賞評論は藝術の生命に觸れ得ないものである。からだ全體で創造した藝術は先づからだ全體でぶつかることによりてのみ味讀鑑賞し得るものである。そのからだ全體でぶつかり得たるからだ全體の動き即ち生命の動きを美學や心理學や哲學や科學によりて説明するに當りて、始めて

概念が役に立つのである。又逆に、概念でこね上げた作品は藝術品と名づけることは出来ない。單に或る空々寂々の形象といふべきものに過ぎない。生命の動きによりて生み出されたる作物は必ずや、動きなるが故にリズムを有し、生命から生れるが故に、リズムを具有してゐる形象そのものである。即ち藝術品である。生命といふことそれ自身がすでに概念である。肉も靈もない。このからだ全體の動きそのものが生命である。この生動を音に線に形に色に言葉に行動に表現するに當つては、私の體驗によると、からだの内側から、だ全體の生動をスタートとして、形象を持った意識が言葉の點や線になつて流れ出て來るのを感じるだけである。この流れ出させる力、形象を持った意識を生む力この力を生命といふ概念であらばせばあらはし得るが、實際それは考へた結果であつて、創作の際は生命のインスピレーションの何のとく、そも、そもあつたものではない、この言葉は自分の實感とはびつたり、合はないといふやうな苦みで、かいては消し、消してはかいたりしてゐるだけの事である。實感的形象の眞を見出すことに悩むだけである。要するに、藝術品の生れるのは、からだ全體の實感に根ざし生動に出發し、その又實感生動の眞を、からだ全體で内より、見出すことであり、感ずることであり考へることであるのだ。

かるが故に、からだ全體の生動によらずして、概念によりて藝術品を見て批評することは即ち美學

や哲學や心理學や科學で批評することは前に述べた如く藝術品を量的に取り扱ひて分類分析するだけであつて質的に本質をつかみ得ない。何はさて置き、藝術品の形象を、からだ全體で見ぬきつかみとつて、それからそのつかみとつたものを美學や哲學や心理學や科學などの概念を使用して説明すべきであり、こゝに概念の使命があり、こゝにその效能が燦として光る。要するに、概念は道具として尊いのである結局、藝術品の創作家も評論家も共に先づからだ全體ではたらかかけねばならぬ、單に美學や哲學や心理學や科學の知識だけでは眞の創作も眞の評論も共に生み得ないといふのが私の主張であるのだ。かくの如き智識萬能的態度の作家を幻影作家と私は叫び、かくの如き智識萬能的の評家を通稱アカデミアンと名づけ、號を石頭子と私は呼んでゐる。私はかくの如き態度をとることを欲しない

二 余のからだ全體主義の藝術

私は、私の藝術上の主義を提唱すればとて、外の美の形式を少しも否定するものではないことを先づ宣言して置かねばならぬ。何となれば、生命は無限の創造であり、始も終もなき存在であるが故に異なつた美の形式を無限に生み出すものであるからだ、そして美の種々相は生命の多様の方面で、同時的輻射の空間的存在であるから、余のからだ全體主義の美の形式より以外に美の形式はないなどいふことは、それ自身が生命そのものの否定であり、動と靜と點と線とのリズムを實感してゐる私の實感そのものの否定になり、自家撞着であるが故である。次に藝術上のイズムと作品との關係について一言して置きたい。藝術家はイズムによりて創造せられるものでもなく、又決してすべきものでもない。からだ全體で創作すべきであることは前述の通りである。もし、然かせずしてイズムによりてのみ創作してゐる作家がありとすれば、その作家は私の所謂幻影作家である。何となればイズムは概念なるが故に。即ち批評家か或は作家が創作の事行^{タート}の產物作品を後から見つめて、その創作の態度、作品の様式に對して思惟した結果の名なるが故に。だからイズムは作品の後に従ふものである。もし、眞の藝術であつて然もイズムが先行するが如く見えし場合は、作家にイズムが刺激を與へて、からだ全體の

う、ぎが生じた場合に限る。此の場合のイズムは作品の刺激であつて、生みの親そのものではない。生みの親はからだ全體の生動そのものである。イズムが先行するにあらずして、此の場合もやはり、創作の事行^{グアイト}が先行してゐるのである。即ちからだ全體の生動が先行してゐるのである。明治大正の文學の歴史をよく見つめると、藝術の新運動の勃興する時は、いつもイズムが先行し、概念で作品を生み出す幻影作家の多いのを發見する。所謂新感覺派の一部分の作家は果してどうであらうか。私自身のからだ全體主義はからだ全體の生動があり、創作といふ事行^{グアイト}が先行し、さうしてその後から此のわが創作態度を反省することによりて生れたものである。即ち始に事行^{グアイト}あり、次に知識思惟ありといふのである。だから私はどうしても私の創作品を提示せねば論が出来ない。おや、おまへが創作家？、とう、さんく、さい、眼で見える人もあるであらうが、うん、俺は創作家だと私は答へて、たゞ、文壇マーケットへ出品しないだけの事だと思つて足していふのみである。最後にいつて置きたいことは、私が所謂新感覺舊感覺に融通無碍の水陸兩棲の作家であるといふ點である。

ちよつと私の作品で引例すると、

夏瘦せの君美しき月夜かな

こんな月並的感覺到美を見出してゐるかと思へば、